

# イエスペルセン・サイクルと学習英文法 Jespersen's Cycle and Pedagogical Grammar for English Learners

大 野 真 機

OHNO Masaki

## 抄録

教育文法には学習上の効率・効果が求められる一方、科学文法には言語学の知見に基づき、より妥当性の高い記述・説明が求められる。両者のあいだには大きな隔たりがあり、それが結果として学習者・教育者の不利益になることは指摘されてきた。海外では近年、そのような言語学と言語教育とのギャップを埋めようとする研究気運が高まりを見せている (Hudson 2004, 2020; Rankin and Whong 2020; Trotzke and Kupisch 2020; Van Rijt and Coppen 2017)。国内においても、従来からの学習英文法が「見直され」(大津 [編] 2012)、また学習英文法の発展した姿が探究されたりもしている (加賀・大橋 [編] 2017; 田子内 2020; 八木 2021)。本論文は、学習英文法ではこれまでまともに扱われてこなかった「通例否定文で」使われる動詞の問題を取り上げ、イエスペルセン・サイクルと関連付けることで一定の解決を探る方向性が擁護される。

キーワード：「通例否定文で」、学習英文法、科学文法、イエスペルセン・サイクル、  
could(n't) care less

## 1. はじめに

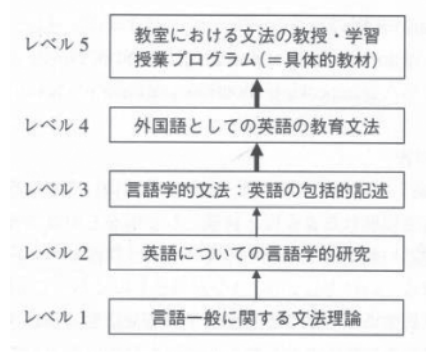
辞書等で調べると、ある種の語句は「通例否定文で」使われるとの記述を目にすることがある。言語学的にはこれらの要素は negative polarity items (否定極性表現) と呼ばれ、これまでに統語論や意味論、語用論からのアプローチで研究が盛んに行われ、著しい研究成果が成し遂げられてきた。しかしながら、こうした言語研究の成果が英語教育・英語学習に還元されることは、これまでほとんどなかったように思われる。

国内の英語学習環境においては、否定文の作り方を学ぶことはあっても、否定について考えることはないことから、学習者 (並びに教師) はそういうもののだとして受け入れるほかなかった。しかし英文法の規則には必ず理由があり、説明を欠いた知識習得に偏重した学びには負の影響があるといわれている (Larsen-Freeman 2003)。

本論文は、通例否定文で使われるとされる動詞 (句) が、文全体の意味は否定のままに肯定文にも表れるようになった事例を取り上げる。そして、科学文法と教育文法との接続を可能にする新しい学習英文法の基礎論構築のためには、「否定のサイクル」(または「イエスペルセン・サイクル」とも) という概念の導入が鍵となることを主張する。

## 2. 対象とする文法のレベル

本論文が研究対象とする学習英文法とは、巨理 (2012) で議論されている概念レベルによる分類のレベル 4、5 (以下、学習英文法と呼ぶ) とレベル 3、2、1 (以下、科学英文法と呼ぶ) を結び付ける文法を意図している。右図で、レベル 1 には自然言語の文法理論 (生成文法や認知言語学など) の理論言語学が位置付けられ、そこでの理論モデルを個別言語の文法記述に当てはめた段階がレベル 2 となる (記述的妥当性を目指す)。レベル 3 の文法とは、その時点での言語学の研究成果を包括的にまとめた文法のことで、



(巨理 2012:67)

具体的には Quirk et al. (1985) や Huddleston and Pullum (2002) などが含まれる。そしてレベル 4 は教師向けの学習英文法、レベル 5 は学習者向けの学習英文法と整理される。前者 (レベル 4) は「英語を教えるための英文法」であり、後者 (レベル 5) は「英語を学ぶための英文法」であるということもできる。

主に教育の現場で活用される学習英文法 (レベル 4-5 文法) は、「英語学習上の効率・効果」を第一義的に求め設計されたものである。一方で、より専門性の高い学問・研究としての英文法 (=科学文法、レベル 1-3 文法) は、言語学の知見に基づき、より妥当性の高い記述・説明を追求する。一般に英語学習のための辞書・文法書は、学習者にとって疑問点解決のための確かに拠り所となっている。しかし学習英文法はその目的のために、説明・記述のための一貫した道具立てをシステムとして欠いていることから、言語現象によってはその取り扱いについて異なる分析を提示することがある。それは、一定の習熟に達した英語学習者 (教師を含む) に混乱を引き起こしてしまっている。

## 3. 研究背景

言語学の成果を英語学習に応用する取り組みはこれまでにあるものの、日本の学習英文法を発展させ科学文法との接続を射程に入れた基礎的な研究はほとんど見当たらないように思われる。また「英語を教えるための英文法」 (=教師文法) は、特に海外の研究者たちを中心に ESL や EFL の文脈の中で研究が進んでいるが (e.g., Larsen-Freeman and Celce-Murcia 2016)、5 文型を基軸とする日本人英語学習者のための学習英文法との関連で科学文法との接続が語られることは、ほとんどない。

「英語を学ぶための英文法」 (=レベル 5 の文法) には、英語学習上の効率と効果が最大限に配慮されていることから、主に規範的な表現の扱いに特化し、説明のための道具立ては限定されてしまっている。また教科書や学習参考書類で「非標準」とされる、あるいは「非文法的」として排除されている英語表現の中には、地域や共同体、年齢層などによっては「容認可能」と判断され、実際には口語表現などで使用されていることがある。つまり、レベル 5 の文法は更新されることがないことから、かつては容認されていなかったものの、その使用が英語母語話者たちのなかで徐々に広がりを見せている表現については、「間違っ

英語という言葉のさらなる深い理解を妨げる要因となっている。その根本の原因は、日本の学習英文法（レベル 5、4 の文法）が科学文法と有機的に結びついておらず、閉じた体系となってしまうことにある。

英語教育政策の分野では英文法はコミュニケーションを支えるものとして位置付けられる一方で、国内研究者たちのあいだでは英文法を「見直す」動きが加速し、その研究領域は広がりを見せている。例えば 5 文型の研究領域では、その起源を辿る研究が大きな成果を挙げている（宮脇 2012、川嶋 2015、斎藤 2022）。これと関連して科学文法と従来の学習英文法との橋渡しの研究も活性化しており（藤田他〔編〕2012、中村 2019、田子内 2020）、このような傾向の高まりは海外でも見られる。アメリカ言語学会の *Language* 誌上には Teaching Linguistics というセクションが設けられるようになり、John Benjamins 社からはジャーナル誌 *Pedagogical Linguistics* が刊行され（2020年）、また関連書籍の出版も相次いでおり（e.g., Berry 2021, Trotzke and Kupisch 2020）、言語学と言語教育を結びつけようとする試みは盛んになってきている。

本論文で扱うテーマは、こうした研究動向の 1 つに位置付けられるものである。日本の英語教育環境を考慮し、また科学文法とも接続する、新しい「英語を教えるための英文法」が求められていると考える。

#### 4. 「通例否定文で」使われるが、肯定文でも使われる動詞（句）について

Huddleston and Pullum (2002: 823) は、「まったく気にしない」の意を表わす *couldn't care less* が *could care less* としても用いられるようになってきていると述べる。そして彼らは、そのような言語変化は珍しいものではないとして、類例として (not) know beans を挙げる。

##### (1) Huddleston and Pullum (2002: 823)

“For many American speakers the expression *I couldn't care less* has lost its negation and the expression is now *I could care less*, still with the idiomatic meaning “I do not care at all”. For these speakers, *care less* is no longer an NPI; *could care less* has become an idiom with a negative meaning (approximately the opposite of its literal meaning). This is not an uncommon development; it is seen again in the development from *I don't know beans about it* “I don't know anything about it” to *I know beans about it* with the same meaning.”

*Couldn't care less* の原義を考えると、not の脱落した *could care less* は論理的には *couldn't care less* と同じ意味を伝達しないはずである。それにも関わらず、アメリカ英語では *could care less* は *couldn't care less* の意味での使用が広がりを見せている。*Could care less* の辞書的な取り扱いについて、例えば Merriam-Webster には次のような説明が見られる。

##### (2) Merriam-Webster による *could care less* の取り扱い

“We define *could care less* and *couldn't care less* on the same page, with the single definition “used to indicate that one is not at all concerned about or interested in

something.” We do not put these seemingly disparate idioms on the same page in order to save space, or so that we might cause you pain. We do it because one is simply a variant of the other, and they are used in a synonymous manner.” (<https://www.merriam-webster.com/words-at-play/could-couldnt-care-less>)

Could care less の定着度について、Garner (2016) の Language-Change Index によると、could care less は5段階あるなかのステージ4 (“usages that are almost universal, being rejected only by the most conservative linguistic stalwarts” (Garner 2016: li)) にあるものと判断されている。ステージ4の段階にある表現がどの程度人々のあいだに定着しているかの感覚的な目安として、Garner は the reason is that の代わりに使われることのある the reason is because を挙げる。

以上から、could care less はもはや非標準的とはいえない程度には定着していると考えてよさそうだとわかる。よって、その形式と意味の対応には説明が求められている。

Could care less については音韻論からの説明 (Hench 1973, Sledd 1993) の他に、語用論 (Pinker 1994/2007) や統語論 (Lawler 1974) の観点からも説明が試みられてきた。またインフォーマルな形ではあるが M. Liberman, C. Potts, E. Bakovic, A. Zwicky らによって *Language Log* というブログ上でかなり深いところまで議論されている。

通常は否定文で使われるが肯定文でも使われることのある要素に、vulgar minimizers と呼ばれるものがある (Horn 2001, Postal 2004)。(3) からわかるように、これらに属する語は一般には taboo terms と見なされる傾向のものが多い。Postal は vulgar minimizers の振る舞いを例示し (4 a,b)、(5) のように述べる。

- (3) SQUAT = Vulgar Minimizers = {beans, crap, dick, diddley, diddley-poo, diddley-squat, fuck-all, jack, jack-shit, jack-squat, piss-all, poo, shit, shit-all, squat} (Postal 2004: 159)
- (4) a. Claudia saw squat/dick. (squat/dick = nothing)  
b. Claudia didn't see squat/dick. (squat/dick = anything) (Postal 2004: 161)
- (5) “[...] they illustrate forms that occur in a fixed position where the presence versus absence of an *overt negation* seems to make no semantic difference.” (Postal 2004: 161)

## 5. Jespersen's cycle

### 5.1. Jespersen's cycle とは

否定表現の史的変化について、イエスペルセンは次のように述べる。

- (6) Jespersen (1917: 4)

“The history of negative expressions in various languages makes us witness the following curious fluctuation: the original negative adverb is first weakened, then found insufficient and therefore strengthened, generally through some additional word, and this in its turn may be felt as the negative proper and may then in course of time be subject to the same

development as the original word.”

Jespersen’s cycle の具体例としては、例えば (7) に表されるような言語変化のパターンが挙げられる。

#### (7) Schematic representation of Jespersen’s cycle

	stage I	stage II	stage III	stage III'
English	ic ne secge (Old English)	I ne seye not (Middle English)	I say not (Early Modern English)	I don’t say (Present-day English)
French	jeo ne dis (Old French)	je ne dis pas (Middle and Modern written French)	je dis pas (Colloquial French)	

(Breitbarth et al. (eds.) 2013)

Stage I では動詞の左側に否定要素が位置しているが、後にその否定の力が弱まるとそれを補強すべく動詞の右側に、ある要素が現れるようになる。この要素には一定の意味の傾向がある (例えば「一粒 (も～ない)」や「一滴 (も～ない)」など)。フランス語の pas の原義は ‘step’ であるが、Stage II で intensifier として振る舞うにつれ元々の意味は薄れるようになる。Stage III はこの intensifier が元々の否定要素に完全に取って代わり、さらには動詞の左側に現れるようになる段階まで含めて考えることもある。(4 a,b) のような vulgar minimizers の例は、しばしば Jespersen’s cycle の Stages II～III と関連付けて議論される (e.g. Breitbarth et al. (eds.) 2013, 2020, Gelderen (ed.) 2009, 2016, Horn 1989, 2001, Israel 2011)。

## 5.2. Jespersen’s cycle との関連

Lawler (1974) では Jespersen’s cycle への直接的な言及はないものの、could care less が可能となったプロセスとフランス語の *ne...pas* の変遷とのあいだの類似性が示唆されている。また Liberman (2004) では次の (8 a-c) にあるようなステップを仮定して、could care less と Jespersen’s cycle とを関連付けようとする試みがなされている。

(8) a. I don’t care.

b. I don’t care even a tiny bit.

c. I couldn’t care less (than I do).

= “*I care so little that there is no careable amount that is less*”.

Could care less を vulgar minimizers と同じ性質を持つものだと捉えるには、慎重な議論が必要なというまでもない。Could(n’t) care less においては、「法助動詞が必要である」こと、および「could 以外の法助動詞では容認度が下がる」ことが報告されているか

らだ。<sup>1</sup> しかしながら、もし could(n't) care less を Jespersen's cycle に位置付けることができるのであれば、それは否定についての理解が深まることにつながるという点で望まれる方向性だと考えられる。

## 6. 今後の展望

言語理論と文法教育を接続するのに不可欠な言語学の概念は何かを調べた van Rijt and Coppen (2017) によると、言語学の専門家たちが重要だと考える上位10項は次のようである。

### (9) Concept ranking (van Rijt and Coppen 2017: 373)

1. Word order
2. Syntactic functions
3. Constituent structure
4. Main syntactic categories (NP, VP, AP, PP)
5. Complementation/modification
6. Negation
7. Recursion
8. Word structure
9. Predication
10. Definiteness

(9) の6番目には「否定」の項目が含まれており、van Rijt and Coppen (2017) の研究結果は否定の概念が言語教育においても重要だと認識されていることを明らかにしている。昨今の言語学の研究動向では、否定の問題を考えるときには「サイクル」との関連を踏まえた議論がますます求められるようになってきている。(9) には挙がっていないが、「サイクル」の概念は今後「否定」と同じくらいに教育文法においても重要な概念となることが予想される (なお、言語変化のサイクル現象は否定だけに限定されず、一般性の高いものである)。Could(n't) care less の分析については、それが Jespersen's cycle に関連付けられるとしても、サイクル上のステージの変遷 (言語変化) を引き起こす要因は何かの解明が次の課題となる。

## 参考文献

- Berry, Roger (2021) *Doing English Grammar: Theory, Description and Practice*. Cambridge University Press.
- Breitbarth, Anne, Christopher Lucas and David Willis (eds.) (2013) *The History of Negation in the Languages of Europe and the Mediterranean: Case Studies*. Oxford University Press.

---

1 <http://websites.umich.edu/~jlawler/aue/giveadamn.html>



- Breitbarth, Anne, Christopher Lucas and David Willis (eds.) (2020) *The History of Negation in the Languages of Europe and the Mediterranean: Patterns and Processes*. Oxford University Press.
- 藤田耕司他 [編] (2012) 『最新言語理論を英語教育に活用する』、開拓社。
- Garner, Bryan (2016) *Garner's Modern English Usage*. Oxford University Press.
- Gelderen, Elly van (ed.) (2009) *Cyclical Change*. John Benjamins.
- Gelderen, Elly van (ed.) (2016) *Cyclical Change Continued*. John Benjamins.
- Hench, Atcheson L. (1973) "Could(n't) care less," *American Speech* 48: 159-159.
- Horn, Laurence (1989) *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press.
- Horn, Laurence (2001) "Flaubert triggers, squattive negation and other quirks of grammar," In Hoeksema et al. (eds.), *Perspectives on Negation and Polarity Items*, 173-202, John Benjamins.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Hudson, Richard (2004) "Why education needs linguistics (and vice versa)," *Journal of Linguistics* 40: 105-30. Cambridge University Press.
- Hudson, Richard (2020) "Towards a pedagogical linguistics," *Pedagogical Linguistics* 1: 8-33. John Benjamins.
- Israel, Michael (2011) *The Grammar of Polarity: Pragmatics, Sensitivity, and the Logic of Scales*. Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1917) *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A. F. Høst.
- 加賀信広・大橋一人 [編] (2017) 『授業力アップのための一歩進んだ英文法』、開拓社。
- 川嶋正士 (2015) 『「5 文型」論考 Parallel Grammar Series, Part II の検証』、朝日出版社。
- Larsen-Freeman, Diane (2003) *Teaching Language: From Grammar to Grammarizing*. Cengage Learning.
- Larsen-Freeman, Diane and Marianne Celce-Murcia (2016) *The Grammar Book: Form, Meaning and Use for English Language Teachers*, 3rd edition. National Geographic Learning/Cengage.
- Lawler, John (1974) "Ample negatives," *Chicago Linguistic Society* 10: 357-377.
- Lieberman, Mark (2004) "Most of the people in the world could care less," *Language Log*, June 16, 2004. Online: <http://itre.cis.upenn.edu/~myl/language-log/archives/001209.html>
- 宮脇正孝 (2012) 「5 文型の源流を辿る: C. T. Onions, *An Advanced English Syntax* (1904) を越えて」、『専修人文論集』 90: 437-465。
- 中村捷 (2019) 『実例解説 英文法』、開拓社。
- 大津由紀雄 [編] (2012) 『学習英文法を見直したい』、研究社。
- Pinker, Steven (1994/2007) *The Language Instinct*. Harper Perennial Modern Classics.
- Postal, Paul (2004) "The structure of one type of American English vulgar minimizer," In Postal (ed.), *Skeptical Linguistic Essays*. Oxford University Press.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rankin, Tom and Melinda Whong (2020) *Grammar: A Linguists' Guide for Language Teachers*. Cambridge University Press.
- 斎藤浩一 (2022) 『日本の「英文法」ができるまで』、研究社。
- Sledd, James (1993) "[Kūt] [Kūt] be [Kūt], [Kūt] it?," *American Speech* 68: 218-19.
- 田子内健介 (2020) 『英米の文法書に学ぶ英文法基礎論』、開拓社。
- Trotzke, Andreas and Tanja Kupisch (eds.) (2020) *Formal Linguistics and Language Education: New Empirical Perspectives*. Springer.
- van Rijt, Jimmy and Peter-Arno Coppen (2017) "Bridging the gap between linguistic theory and L1 grammar education - experts' views on essential linguistic concepts," *Language Awareness*, 26:4, 360-380. Routledge.
- 巨理陽一 (2012) 「学習英文法を考える際の論点を整理する」、大津由紀雄 [編] (2012)。
- 八木克正 (2021) 『現代高等英文法—学習文法から科学文法へ—』、開拓社。

Received : September, 30, 2022

Accepted : November, 2, 2022